

委託事業実施内容報告書
平成27年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業
【地域日本語教育実践プログラム(B)】
実施内容報告書

受託団体名 Vivaおかざき！！

1. 事業名称

市民が主役！！参加型ワークショップを通した体制整備事業1.0

2. 事業の目的

外国人市民が地域に参加できる関係づくりのため、生活上の「言葉の壁」を乗り越えるための日本語教育の体制整備を行う。そのためには一般市民(外国人住民・日本人住民)や日本語ボランティア自身が協働し、誰もが安心して参加できる「学びの場」のあり方について考えていくことが重要であると考え。そこで、岡崎市の多文化共生に資する日本語教育のあり方を一般市民が考えるワークショップを実施する。そして、そこで考えた指針を実行しながら体制整備のためのネットワーク構築を行う。

3. 事業内容の概要

本事業では、市民参加型ワークショップ「岡崎の地域日本語教育を考えよう」を開催し、岡崎市での多文化共生や日本語教育について理解し、地域日本語教育のあり方について検討する。また、日本語教室運営者向けにも参加型ワークショップ「Viva!!つながるセミナー」を開催し、地域とつながる優良事例を学ぶことを通して、自身の活動を振り返り、地域の日本語教育の質的向上を図る。日本語教室では、生活に役立つテーマを設定し、コミュニケーションを中心とした活動を行う。地域住民として必要な生活知識を身に付けるとともに、生活者としての日本語の運用能力向上を目指す。また、成果報告会を開催し、本事業の取組を広く知ってもらい、多文化共生につながる日本語教育の体制整備の重要性を周知するとともに、岡崎市内だけでなく近隣地域とのネットワーク構築を行う。

4. 事業の実施体制について

- ①コーディネーター:長尾晴香(Vivaおかざき！！代表)
ワークショップの調整・開催から日本語教室の運営など全体の取りまとめを行うとともに、事業責任者として全ての取組を概観する。
- ②事業担当者:
下記のもの、コーディネーター・長尾をサポートしながら事業を担当していく。また、各取組には、補助者として関わる。
・鈴木美帆(Vivaおかざき！！理事)
・岸本サンドラ(Vivaおかざき！！理事)
・大黒浩司(Vivaおかざき！！)
・猪飼由美子(岡崎市民生委員児童委員協議会 愛宕地区主任児童委員)
鈴木はこれまで岡崎市国際交流協会の中で、国際交流にかかる市民活動を行ってきた経験があるとともに、当団体立ち上げ当初から多文化共生の普及及び日本人住民への理解促進に取り組んできた。また、外国人自助組織とのネットワークも深い。岸本は、自身が日系アルゼンチン人であること、在日期间20年以上であることから、外国人住民をリードする立場として団体に関わっている。以上2名は、こうした背景及びネットワークを活用し、本事業への協力者を募ったり、事業運営を主体的に担う。大黒は、コンテンツSEOの知識に長けておりブログ等本事業の実績等の広報を担当する。また、大学で留学生担当事務を行っている経験から、日本語教室等の補助等を行う。猪飼は、長年保育士として働いてきた経験とその中で外国人の子どもたちとのかかわりから、外国人を取り巻く課題に対して課題意識を持ってきた。また、地域の民生委員や児童委員も務め、地域とのかかわりも深い。そのため地域との調整等を担当し、コーディネーターである長尾をサポートする。
- ③アドバイス体制の整備
運営委員会にできるだけ岡崎市及び東海地区の多文化共生事業に関係し、かつ多様な出自の委員を選定した。委員にコメントをいただく他、下記の3名についてさらに詳細な事業運営を概観していただき、相談しながら事業をよりよいものとする。
・鈴木温子(岡崎市民協働推進課国際班長)
・北村祐人(名古屋大学とよた日本語学習支援システム システム・コーディネーター)
・土井佳彦(NPO法人多文化共生リソースセンター東海 代表)
事業を進めていく上で、上記の3名アドバイスをもらう。
鈴木氏は、行政の立場から本事業がどのように市の中で位置づけられるか、北村氏は地域日本語教育の体制整備の観点から、土井氏はワークショップでの講師及び多文化共生に本事業がどう寄与していくかという視点で助言をいただき、本事業をより効果的なものとしていく。
- ④まちづくり・外国人当事者など多様な視点からの事業推進
NPO法人多文化共生リソースセンター東海 土井佳彦氏や、地元の大学で日本語講師の育成をされている愛知産業大学短期大学の川崎直子氏といった多文化共生・日本語教育の専門家だけでなく、岡崎市でまちづくりを行うNPO法人岡崎まち育てセンター・りた 天野裕氏にも参加していただき、まちづくりの視点からも日本語教育を考えていく。また取組2などでは、まちづくりの専門家にどのような視点で、日本語教育事業を社会に位置付けていくのかのアドバイスをもらう。また、ブラジル・中国・フィリピンの外国人コミュニティからも参加してもらい、外国人市民としての意見も反映できる体制としたいと考える。
- ⑤さまざまな機関による日本語教育の内容への協力
当団体は、これまで国際交流イベントや防災の取組の中で、警察や岡崎市防災担当課、教育委員会等と連携を行ってきた。こうした実績を踏まえて、日本語教室の実施等の日本語教育の内容面での連携を行い、より実践的な活動内容を提供していく。また、日本人市民に内容面で関わってもらうことで、多文化共生の意識の啓発を行う。

5. 運営委員会の開催について

【運営委員】

1	天野 裕	NPO法人岡崎まち育てセンター・りた
2	土井 佳彦	NPO法人多文化共生リソースセンター東海
3	川崎 直子	愛知産業大学短期大学
4	山口 ルイザ	岡崎ブラジル協会
5	忠内 亜倫	岡崎中国人協会
6	木俣 亜美	岡崎フィリピンコミュニティ
7	北村 祐人	名古屋大学とよた日本語学習支援システム
8	長尾 晴香	Vivaおかざき！！
9	鈴木 美帆	Vivaおかざき！！
10		

【概要】

回数	開講日時	時間数	場所	出席者	議題及び検討内容
1	平成27年5月28日(木) 10:00～12:00	2時間	東部地域交流センター・むらさきかん 第5活動室	天野 裕 土井 佳彦 川崎 直子 北村 祐人 長尾 晴香	議題 1. 目的・ねらいの確認 2. 実施計画について
	平成27年6月13日(木) 13:00～15:00	2時間	岡崎市図書館交流プラザりぶら 市民活動センター	山口 ルイザ 忠内 亜倫 木俣 亜美 長尾 晴香 鈴木 美帆	検討内容 「市民が主役！！参加型ワークショップを通じた体制整備事業1.0」の事業計画に基づき、事業の目的、ワークショップ、日本語教室の運営の基本方針と流れ、成果報告会の計画について説明が行われて、その内容について意見交換が行われた。
2	平成27年10月18日(日) 9:30～11:30	2時間	連尺学区市民ホーム 小会議室	天野 裕 土井 佳彦 川崎 直子 山口 ルイザ 忠内 亜倫 木俣 亜美 北村 祐人 長尾 晴香 鈴木 美帆	議題 1. 中間報告 2. 実施計画の修正 検討内容 市民参加型ワークショップ「岡崎の地域日本語教育を考えよう」、関係者向けワークショップ「Viva!!つながるセミナー①」、前半の日本語教室の実施状況の報告を行い、これまでの成果と課題について意見交換を行った。また、成果報告会や後半の日本語教室の方針について、地域の日本語教育の体制整備として何が必要かを検討した。
3	平成28年2月7日(日) 9:30～11:30	2時間	東部地域交流センター・むらさきかん 第3活動室	天野 裕 土井 佳彦 川崎 直子 山口 ルイザ 忠内 亜倫 木俣 亜美 北村 祐人 長尾 晴香 鈴木 美帆	議題 1. 最終報告 2. 成果と課題検討 検討内容 2回目の関係者向けワークショップの「Viva!!つながるセミナー②」、成果報告会、日本語教室の実施状況を説明し、本事業の成果をどのように地域に発信していくべきかを検討した。また、次年度以降の日本語教育事業についても、本事業の成果と課題を踏まえて意見交換が行われた。

6. 取組についての報告

取組1: 市民参加型ワークショップ「岡崎の地域日本語教育を考えよう」の開催

(1) 体制整備に向けた取組の目標

- ・外国人市民も日本人市民も含めて、外国人の生活に必要な日本語教育について考え、既存の日本語教室の「枠」に囚われない、そして社会全体とその将来を見据えた日本語教育プログラムの開発及び岡崎における地域日本語教育に関する指針のとりまとめを目標とする。
- ・日本語教育に取り組む教師・ボランティアだけでなく、一般市民や外国人市民、行政及びそれ以外の関係機関の職員等で将来の日本語教育を考える
- ・一般市民や日本語教育に取り組むボランティアの多文化共生・国際理解の向上を図る

(2) 取組内容

本取組では、全7回の参加型ワークショップを通して、外国人市民・日本人市民、一般市民・多文化共生・日本語教育関係者を問わず、外国人の生活に必要な日本語教育について考える場を創出する。その場で多様な参加者により、既存の日本語教室の「枠」に囚われない、そして社会全体とその将来を見据えた、日本語教育プログラムを議論しながらつくり、社会に対して提案を行う。

(3) 対象者

- ・既存の日本語教室ボランティア
- ・外国人市民
- ・日本語教育・多文化共生に関心のある市民

(4) 参加者の総数 36 人(延べ人数ではなく、受講した人数を記載すること。)

そのうちの日本語学習者数 _____ 人

【出身・国籍別内訳】

中国	1人	インドネシア	人	・モンゴル 1人
韓国	人	タイ	人	
ブラジル	3人	ペルー	人	
ベトナム	人	フィリピン	人	
ネパール	人	日本	31人	

(5) 開催時間数(回数) 14時間 (全7回)

(6) 活動の具体的内容

回数	開催日時	時間数	場所	参加者数	取組のテーマ	授業概要	指導者名	補助者名
1	平成27年6月28日 (日) 13:00~15:00	2時間	連尺学区市民ホーム	23人	主旨説明と目標設定	本取組のオリエンテーションとして、主旨説明と、目標設定を行った。言葉の壁やマイノリティーの体験をするワークを行い、地域に暮らす外国人市民について考えながら、参加者自身が本取組に参加する狙いを設定した。	吉岡嗣晃	大黒浩司
2	平成27年7月5日 (日) 13:00~15:00	2時間	岡崎市図書館交流プラザりぶら	16人	岡崎市の外国人の状況	目の前の学習者だけでなく、日本全体または岡崎市における外国人の現状と課題について理解し、外国人市民がどんな困り事を抱えている可能性があるのか話し合った。	土井佳彦 吉岡嗣晃	大黒浩司
3	平成27年7月19日 (日) 13:00~15:00	2時間	岡崎市図書館交流プラザりぶら	10人	外国人市民の声を聞いてみよう	岡崎市に暮らしている外国人市民に日本での生活での困り事や、どう解決をしているか実際の声を聞いた上で、日本語教育としてどんな支援が必要で、どんな協力者がいるかを検討した。	吉岡嗣晃	大黒浩司
4	平成27年8月2日 (日) 13:00~15:00	2時間	岡崎市図書館交流プラザりぶら	10人	地域と日本語教育	近隣地域での日本語教育の取組を知り、地域で行う日本語教育の位置づけと、なぜ日本語教室が地域とつながり、協働していく必要があるのかを参加者と共に考えた。	北村祐人 吉岡嗣晃	大黒浩司
5	平成27年8月23日 (日) 13:00~15:00	2時間	岡崎市図書館交流プラザりぶら	6人	岡崎の日本語教育の課題と解決策を考えよう	これまでのインプットと、愛知県での地域日本語教育についての調査がまとめである「あいち地域日本語教育白書2015」を活用し、岡崎市の日本語教育の課題の中から議論を深める2つの課題を選定した。	吉岡嗣晃	大黒浩司

6	平成27年9月6日 (日)13:00~15:00	2時間	連尺学区市民 ホーム	7人	解決策のプログラム作 り	第5回で選定した課題2つについて、ど んな解決策があるか、そのためにどん な協力者が必要かを検討し、実行する ための具体的なスケジュールに落とし 込みを行った。	吉岡嗣晃	大黒浩司
7	平成27年10月4日 (日)13:00~15:00	2時間	岡崎市図書館交 流プラザりぶら	8人	全体まとめ	第6回までにまとめた内容を実行する ために誰に(どこに)プレゼンすべきか を決め、模擬のプレゼンテーションの場 としてグループごとに解決策とスケ ジュール案を発表した。	吉岡嗣晃	大黒浩司

(7) 特徴的な活動風景(2~3回分)

活動例①

【第3回 平成27年7月19日(日)】

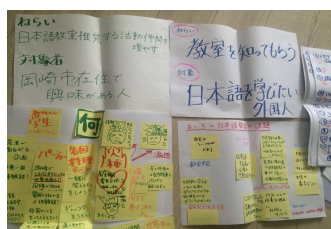
1回目、2回目の内容を踏まえ、実際に岡崎市に暮らす外国人住民の体験について話してもらおうワークを行った。日本語が分からなくて生活上で困ること、日本語が分かっていても苦勞することや、実際にどう解決しているか具体的な話を聞き、地域日本語教育としてどんな支援ができそうか検討するだけでなく、実際に実行するためにはどんな協力者・協力機関が必要か、もしくは可能性がありそうか検討した。



活動例②

【第5回~7回 平成27年8月23日(日)、9月6日(日)、10月4日(日)】

5回目まで、今までのインプットと愛知県の地域日本語教育についての調査をまとめた冊子を活用しながら、岡崎市の日本語教育の課題の中から重要だと思うものを2つ挙げた。課題①として、「日本語教室の存在を知られていない」、課題②としては「日本語教育に関わる人材不足」を選定した。6回目は2つの課題の解決策を検討した。課題①の解決策としては「外国人市民向け日本語教室のリスト作り(多言語版)」と「日本人市民に日本語教育の必要性を知ってもらおう機会の創出」、課題②の解決策としては「多文化共生理解推進のための交流イベントの開催」が意見として出た。どんな協力者が必要かを検討し、実行するための具体的なスケジュールに落とし込みを行った。最後の7回目には、内容を実行するために誰に(どこに)プレゼンすべきかを決め、模擬のプレゼンテーションの場としてグループごとに解決策とスケジュール案を発表した。



(8) 目標の達成状況・成果

外国人市民5名と日本人市民31名で、大学生、行政職員(岡崎市、刈谷市、愛知県)、大学教員、行政書士など多様な属性の参加者があり、外国人の生活に必要な日本語教育について外国人市民も日本人市民も一緒に考える機会をつくることができたことは大きな成果だった。外国人市民の声を聞くことで新たな気づきがあり、日本語教育に関わったことのない参加者にも、日本語教育の重要性を理解してもらうことができた。また、他地域の日本語教育の実例を学んだり、外部講師の話から、様々な日本語教育の在り方について理解を深めることができた。その上で、既存の日本語教室の「枠」に囚われない、そして社会全体とその将来を見据えた岡崎市に必要な日本語教育プログラムとは何かを考える視点を参加者に持ってもらうことができた。

(9) 今後の改善点について

異なり数で36名がワークショップの参加するなど多様な参加者を巻き込みことができたが、既存の日本語教室からの参加者は少なかった。地域単位でつながっていくことで日本語教育の質を向上させたいと考えたが、既存の日本語教室からは消極的な反応が多く、地域・他団体とのネットワークの必要性を感じていないことが分かった。しかし、一方で、目的や課題を共有できる教室・団体同士であれば市外や県外からも参加があったことから、地域ではなく目的や意識を共有できる団体とつながる機会を今後は積極的ににつくっていきたい。また、現在すでに日本語教育に関わっている方の中でも、多文化共生や地域につながる日本語教育への意識が低く、多様なあり方について情報発信を行っていくことで、理解促進に努めたい。

取組2: 日本語教室運営者向け参加型ワークショップ

(1) 体制整備に向けた取組の目標

市内外の関係者のネットワーキング構築と日本語教育に関する取組の優良事例を知ることで、自身・自団体の活動の内省を促し、今後の改善につなげるとともに、参加団体によるネットワークを構築することにより日本語教育の体制整備を図る。

(2) 取組内容

日本語教育に限らず地域を巻き込んで取り組んでいる事業について学び、プログラムデザインのコツを学べる場を設ける。(2回実施/年度)

(3) 対象者

・既存の日本語教室ボランティア
・外国人市民
・日本語教育・多文化共生に関心のある市民

(4) 参加者の総数 29 人(延べ人数ではなく、受講した人数を記載すること。)

そのうちの日本語学習者数 _____ 人

【出身・国籍別内訳】

中国	人	インドネシア	人
韓国	人	タイ	人
ブラジル	人	ペルー	人
ベトナム	人	フィリピン	2人
ネパール	人	日本	27人

(5) 開催時間数(回数) 6時間30分 (全2回)

(6) 取組の具体的内容

回数	開催日時	時間数	場所	参加者数	取組のテーマ	授業概要	指導者名	補助者名
1	平成27年10月11日(日) 12:30~15:00	2時間30分	連尺学区市民ホーム	14人	地域とつながる★協働のデザイン	外部講師の伊東氏から地域で行ってきた活動の紹介をしていただき、『あいち地域日本語ハンドブック「つながるひろがる」』に記載されている他団体の協働事例から、さまざまな連携や協働の形を学び、参加者の感じている課題をどのような協働先とどのような活動をすることで解決できそうか話し合った。	伊東 浄江 吉岡 嗣晃	大黒 浩司
2	平成27年11月29日(日) 10:00~15:00	4時間	東部地域交流センターむらさきかん	15人	日本語教室に活かす★まちづくりのノウハウ	地域に暮らすさまざまな人、資源、ニーズを組み合わせることで地域の課題を解決している事例を通して、まちづくりにおける協働のコツを学び、既存の日本語教室の形に囚われない自由な発想で外国人市民と日本人市民、地域をつなぐ企画づくりの体験ワークを行った。	中協 健児 吉岡 嗣晃	大黒 浩司

(7) 特徴的な活動風景(2~3回分)

活動例①

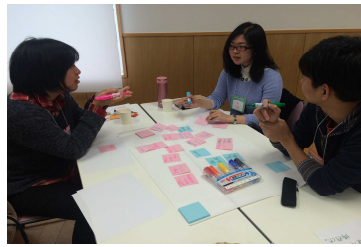
【第1回 平成27年10月11日(日)「地域とつながる★協働のデザイン」】
NPO法人トルシーダの伊東氏から、団体設立からどのように地域・行政・他団体と協働しながら事業を進めてきたかをお話いただき、伊東氏が編集に関わった『あいち地域日本語ハンドブック「つながるひろがる」』に記載されている他団体の協働事例を読み、さまざまな連携や協働の形を学んだ。そして、参加者の感じている課題をどのような協働先とどのような活動をすることで解決できそうか2グループに分かれて意見を出し合った。今まで考えたことのなかった協働先や、つながる方法を参加者同士で気づく機会となった。



活動例②

【第2回 平成27年11月29日(日)「日本語教室に活かす★まちづくりのノウハウ」】

地域に暮らすさまざまな人・資源・ニーズを組み合わせることで地域の課題を解決している「まちづくり」の視点から地域日本語教育を考えるため、大阪を中心にまちづくりに取り組んでいる中脇氏より、地域の人を巻き込んだ事例紹介と、まちづくりに関する協働のコツについて講義をしていただいた。中脇氏の話聞いて、参加者がやってみよう企画をグループごとに考え、どうしたら地域やいろいろな人を巻き込めるか話し合った。そして、日本語教育や外国人市民と日本人市民の交流・多文化共生につながる工夫を加えたプランを作った。プラン作りの楽しさを体験するとともに、既存の教室の形ではなくても地域日本語教育や多文化共生につながる活動ができることを学んだ。



(8) 目標の達成状況・成果

2回のワークショップで、29名の参加者がおり、地域との「協働」・「つながる」をキーワードに、日本語教育の関係者に新しい視点をあたえる機会にできたと感じている。また、市外や県外から地域の枠を越えた参加があり、今までつながりがない団体・地域と広域的なネットワークをつくることができた。このネットワークを活かして、今までできていなかった地域間での情報共有などを行って、地域全体の日本語教育の質の向上につなげたい。また、日本語教育とまちづくり等の他分野との連携や新しい発想で日本語教育を捉えなおす機会をつくれたことも成果の一つである。

(9) 今後の改善点について

地域との「協働」・「つながる」をキーワードにした研修はほとんど開催されず、各団体の取組を知る機会がないのが現状である。本取組でつながることのできた地域・団体とのネットワークを今後も継続していけるように、研修の場やお互いの取組を知れる場をつくっていききたい。

取組3-1:生活に役立つ日本語教室①

(1)体制整備に向けた取組の目標

外国人の暮らしに役立つ日本語及び知識を、実践を通して学べる場を参加型で提供する。また一般市民の日本語教室への参加を積極的に呼びかけ、外国人市民・日本人市民の相互理解の場づくりを行う。日本語教室を通して、外国人市民の学習ニーズ発掘とネットワーキングに取り組む。

(2)取組内容

「生活に役立つ日本語教室」は、学習者が体験・行動を通して生活に密着した日本語を使えるようになることを目指し、コースをデザインした。テーマとしては、生活で遭遇頻度が高いと思われるテーマを選定。また、各テーマは「①知識」、「②行動・体験」、「③ふりかえり」の3パート構成で行った。「①知識」ではそのテーマの活性化と、関連する生活知識や語彙・表現を学習する。「②行動・体験」では教室参加者同士で一緒に生活上の行為を体験してみる。「③ふりかえり」ではそのテーマの生活知識と学習項目を整理し、学習成果を確認するとともに、教室での学びを実際の生活に繋げるため、発展的な活動をしたり自己評価活動をした。たりした。

(3)対象者

・外国人市民

(4)参加者の総数 48 人(延べ人数ではなく、受講した人数を記載すること。)

そのうちの日本語学習者数 48 人

【出身・国籍別内訳】

中国	2人	インドネシア	2人	
韓国	0人	タイ	0人	・モンゴル 5人
ブラジル	24人	ペルー	1人	・フランス 1人
ベトナム	2人	フィリピン	9人	・アルゼンチン 1人
ネパール	0人	日本	0人	・オーストラリア 1人

(5)開催時間数(回数) 20 時間 (全 10 回)

(6)取組の具体的内容

回数	開催日時	時間数	場所	参加者数	取組のテーマ	授業概要	指導者名	補助者名
1	平成27年6月7日 (日) 15:00~17:00	2	岡崎市図書館交流プラザらび	34人	・自己紹介 ・レベルチェック (自己評価)	全体のオリエンテーションと、Can-do-statementsを活用した自己評価チェックリストの回答をベースにA(上級)~G(初級)までレベル分けし、各グループで自己協働を行った。	高田優子	大黒浩司 鈴木美帆 猪飼由美子
2	平成27年6月14日 (日) 15:00~17:00	2	岡崎市図書館交流プラザらび	24人	買い物① ・スーパーのチラシを 読む	スーパーのチラシを使って学習を行った。上級は、チラシの役割や買いたいものについて話し合った。初級はチラシの中の数字やことばの確認を中心に行った。	高田優子	大黒浩司 鈴木美帆 猪飼由美子
3	平成27年6月21日 (日) 15:00~17:00	2	岡崎市図書館交流プラザらび	23人	買い物② ・実際にお店に行こう ・訪ね方	実際にスーパーに行き、上級は店員さんに質問したりポイントカードについて学び、初級はほしい商品を探したり、店内の表示などのことばを確認した。	高田優子	鈴木美帆 千葉月香 稲吉歩美
4	平成27年6月28日 (日) 15:00~17:00	2	岡崎市図書館交流プラザらび	23人	買い物③ ・まとめ	チラシやスーパーに行った時に学んだことばや表現の振り返り、スーパーのどの位置にどんな商品や表示があったかを店内図を書いてまとめた。	北村祐人	大黒浩司 鈴木美帆 猪飼由美子 稲吉歩美 千葉月香
5	平成27年7月5日 (日) 15:00~17:00	2	岡崎市図書館交流プラザらび	11人	バス① ・時刻表の読み方 ・バスの乗り方	バスに乗る時の基本ルールや時刻表の読み方を確認した。上級は名鉄バスの発行している冊子を確認し、初級はポイントをまとめたワークシートを使って学習を行った。	千葉月香	大黒浩司 鈴木美帆 猪飼由美子 稲吉歩美
6	平成27年7月12日 (日) 15:00~17:00	2	岡崎市図書館交流プラザらび	18人	バス② ・実際にバスに乗ろう ・表示やアナウンス	実際にバスに乗って、地域の和菓子屋に出掛けた。時刻表をよんで帰りのバスの時間を確認したり、バス車内の表示やアナウンスの内容を学んだ。	千葉月香 稲吉歩美	大黒浩司 鈴木美帆
7	平成27年7月19日 (日) 15:00~17:00	2	岡崎市図書館交流プラザらび	12人	バス③ ・まとめ	バスに乗る時の基本ルールや時刻表、車内の表示やアナウンスで学んだことばや表現を振り返り、模造紙にまとめて発表した。	千葉月香 稲吉歩美	大黒浩司 鈴木美帆
8	平成27年7月26日 (日) 15:00~17:00	2	岡崎市図書館交流プラザらび	8人	ゴミ分別① ・ルールを学ぼう	岡崎市のゴミ分別についての冊子を使い、上級は捨てる際の注意事項などを確認し、初級は「可燃」など必要なことばの意味などを確認した。その後、準備したゴミを実際のゴミ袋やかごに分別を行った。	稲吉歩美 齊藤聖菜	大黒浩司 鈴木美帆
9	平成27年8月2日 (日) 15:00~17:00	2	岡崎市図書館交流プラザらび	9人	ゴミ分別② ・ゴミを分別しよう ・まとめ	前回学んだことの振り返りと、岡崎市が作成したごみの捨て方のビデオを視聴し、グループごとに大事だと思うポイントをまとめて発表した。	千葉月香 稲吉歩美	大黒浩司 鈴木美帆

10	平成27年8月9日 (日) 15:00~17:00	2	岡崎市図書館交 流プラザりぶら	10人	・全体まとめ	買い物、バス、ゴミ分別を含めて、コー ス全体で学んだことを振り返った。ま た、初回に行った自己評価チェックリ ストを行い、どの項目が上がった か・下がったか、その理由を話し合っ た。	千葉月香 稲吉歩美	大黒浩司 鈴木美帆
----	---------------------------------	---	--------------------	-----	--------	--	--------------	--------------

(7) 特徴的な活動風景(2~3回分)

活動例①

【第3回 平成27年6月21日(日)】

実際にスーパーへ行って活動を行った。上級レベルの学習者は、店員さんに質問をする時間をつくってもらい、普段聞けないことを聞いたり、買い物時に知っていると得をするポイントカードについて学んだ。初級レベルの学習者は、ほしい商品を店内から探したり、商品のラベルを読んだり、店内の表示などのことばを学んだ。普段は何気なく買っている商品も何が違うのか比較したり、どれがお得なのかを探したり、ことば以上に生活に役立つ知識を身に付けることができた。



活動例②

【第6回 平成27年7月12日(日)】

実際にバスに乗って、地域の和菓子屋に行って帰ってくるという活動を行った。時刻表を読んでバスの時間と、目的地のバス停の名前を確認してから出発。和菓子屋さんでの買い物も楽しみながら、教室に時間内に戻ってくるために帰りのバスの時間も気にしながら行動してもらった。バスの乗り方だけでなく、バス車内の表示やアナウンスの内容についても気になることばや表現をメモしておいて、後で確認をするようにした。



活動例③

【Can-do-statementsの活用】

本コースでは生活上の言語行動を教室活動として、必要に応じて参加者同士でサポートし合いながら体験することで、実生活に役立つ生活知識と言語を獲得していくことを目指した。実際の場面のできる言語行動を具体的に記述したものであるCan-do-statements(以下Cds)を主軸としてクラス活動を行った。
まず、各回の活動前後に学習項目に関するCdsで自己評価活動を行った。活動前の自己評価活動は普段の自分の言語行動をふりかえって自分の課題を整理すること、その日の活動や学習項目についてイメージを膨らませること(テーマの活性化)を目的に、活動後の自己評価活動は毎回の活動の学習成果と今後の課題を学習者自身に意識してもらうことを目的に行った。
クラス活動の計画もCdsを中心に行うことで、学習する内容が全て実生活で必要となる言語行動に結びつくよう配慮した。学習者に実際の生活での言語行動であるCdsで自己評価を行うことで、教室での学習項目と教室外の言語行動を結びつけながら、実生活で使える日本語を学習してもらえよう心掛けた。

活動例④

【日本語パートナーの活用】

日本語パートナーと呼ぶ活動・会話補助のためのボランティアを導入した。日本人市民だけでなく外国人市民も日本語パートナーとして参加してもらった。日本語講師は全体のコーディネートを行い、日本語パートナーが学習者と1対1でついで、会話や細かい質問に答える形で教室を行った。学習者になるべくたくさん日本語に触れる環境をつくるとともに、普段は聞けない小さな疑問も聞きやすい教室づくりを心掛けた。外国人市民の日本語パートナーには、初級レベルの学習者に対して必要に応じて指示内容を通訳してもらい、初級レベルの学習者の定着率が高かった。
また、日本語を学ぶだけでなく地域についての情報交換や、地域の住民として交流にもつながった。

(8) 目標の達成状況・成果

コース最終日にコースや教室活動、日本語講師、参加者に関する無記名のアンケートを実施した。学習者と日本語パートナーには異なる項目を尋ねた。学習者には使用言語のアンケート用紙を配付し、使用言語で回答してもらい、回収後、日本語に翻訳した。

「言語学習／教育」といえば冊子のテキストがあり、事前に定められた共通の学習項目を学んでいくという学習／教育スタイルをイメージする人も多いようである。そのため、本コースで行った、日本語講師がその日の学習項目を明示的に提示しない学習／教育スタイルに初めは戸惑う参加者もいた。しかし、アンケートの解答からも体験や母語話者とのやりとりを通して自ら学んでいくスタイルへの肯定的な意見も多く見られ、徐々にスタイルが受け入れられたと言える。

コースの成果として、①学習者に学習効果の実感を持ってもらえたこと、②日本語パートナーに外国人が困難に思う生活上の行為を知ってもらえたこと、③多くの人に参加してもらえたこと、④参加者同士で交流を持ち、知り合いになってもらえたことが挙げられる。生活に密着したテーマや活動を扱ったことで、実生活での言語行動を行う自信をつけた学習者も見られた。

日本語パートナーにとってもこのような学習過程と一緒に体験・活動しながら間近で見ること、外国人住民の日本での生活における困難さを実感できる機会だったと言える。また、普段の生活ではなかなか交流することができない日本人住民と外国人住民が互いに知り合い交流する機会を多くの人に提供できたことは成果だった。

(9) 今後の改善点について

課題としては①多くの人に参加してもらえたものの、継続して参加した日本語パートナーが少なかったこと、②参加者（学習者、日本語パートナー含め）へ情報（開催場所や次回の活動内容）が不足していたこと、③クラス分け方法の再検討の必要性が挙げられる。

学習者は参加者の約20%である11名がコース全体で7回以上参加した。これに対して、日本語パートナー（以下、JP）で7回以上参加した人は1名しかいなかった。学習者のJPの継続者が少なかったことは参加者自身の都合によるものや教室運営上の問題（活動スタイル合わなかった、日本語講師の教室活動中のサポートが十分でなかったなど）が考えられるが、実際の理由は知ることができなかった。次期以降は日本語パートナーに継続してもらえよう、サポートを手厚くしていく必要がある。

参加者への情報共有の問題として、運営側の問題で、教室を開催する場所が同じ会場を期間を通して予約することができず、開催場所が分からずに混乱をさせてしまった。また日本語パートナーから、次回のクラス活動の内容を事前に知らせてほしいという意見も出たので、情報共有をするために学習者・日本語パートナーのメーリングリストを作成するなどの対策をしていきたい。（第二期より作成済み）

今期はCdsを参考に、口頭能力に重点をおいてクラス分けを行った。そのため、読み書きを行う活動では同じグループの学習者でも差が出てしまい、日本語パートナーの負担にもつながってしまった。

取組3-2: 生活に役立つよみかき教室

(1) 体制整備に向けた取組の目標

外国人の暮らしに役立つ日本語及び知識を、実践を通して学べる場を参加型で提供する。また一般市民の日本語教室への参加を積極的に呼びかけ、外国人市民・日本人市民の相互理解の場づくりを行う。日本語教室を通して、外国人市民の学習ニーズ発掘とネットワーキングに取り組む。

(2) 取組内容

「生活に役立つよみかき教室」はテーマに沿ってやりとりや行動・体験もしながら、日本語を読んだり書いたりする活動に重点をおいて学習をすすめるクラスである。扱う文字種はひらがな・カタカナ・漢字の中から各学習者のレベルとニーズに合わせてその都度取捨選択して進め、教室全体での到達目標は定めないこととした。また、ひらがなやカタカナを50音順に学習していくのではなく、参加者同士のやりとりや行動・体験のなかで学んだ日本語の音と文字を結び付けて学習を進めることを指針とした。

(3) 対象者

・外国人市民

(4) 参加者の総数 11 人(延べ人数ではなく、受講した人数を記載すること。)

そのうちの日本語学習者数 11 人

【出身・国籍別内訳】

中国	0人	インドネシア	0人	・アメリカ 1人 ・ ・
韓国	0人	タイ	0人	
ブラジル	4人	ペルー	2人	
ベトナム	2人	フィリピン	2人	
ネパール	0人	日本	0人	

(5) 開催時間数(回数) 17 時間 (全 8 回 ※第3回だけ3時間)

(6) 取組の具体的内容

回数	開催日時	時間数	場所	参加者数	取組のテーマ	授業概要	指導者名	補助者名
1	平成27年8月30日 (日) 15:00～17:00	2	岡崎市図書館交流プラザりぶら	7人	・自己紹介 ・オリエンテーション	全体のオリエンテーションと、自己紹介を行った。名前、国、仕事、などをマス目練習シートに書いたり、自己紹介の内容をメモしてことばの練習を行った。	千葉月香	鈴木美帆
2	平成27年9月6日 (日) 15:00～17:00	2	岡崎市図書館交流プラザりぶら	5人	・救命救急の基礎	心肺蘇生法の教材をJPと一緒に読み、手順や基本の語彙を確認し、マス目練習用紙に書く練習をした。また、その行動に伴う日本語(「大丈夫ですか?」等)も確認した。	千葉月香	鈴木美帆
3	平成27年9月20日 (日) 10:00～13:00 または 14:00～17:00	3	連尺学区市民ホーム	4人	・救命救急講座 (3時間講習)	「支援に役立つ日本語教室」の学習者に補助してもらいながら、岡崎消防署による普通救命講習を受講。	千葉月香	鈴木美帆
4	平成27年9月27日 (日) 15:00～17:00	2	岡崎市図書館交流プラザりぶら	5人	・救命救急のまとめ	心肺蘇生法の手順をJPと話してもらい、手順を思い出した人からイラスト入りワークシートに記入して学んだ内容の振り返りを行った。	千葉月香	鈴木美帆
5	平成27年10月4日 (日) 15:00～17:00	2	岡崎市図書館交流プラザりぶら	4人	・消火器の使い方 ・消化活動の基礎	消火器の使い方をプリントを読んで基本を理解した上で、消火器の実物を見ながら流れとことばの練習を行った。	千葉月香	鈴木美帆
6	平成27年10月11日 (日) 15:00～17:00	2	岡崎市図書館交流プラザりぶら	8人	・消火器を使ってみよう	消火器の部位名(安全栓など)を実物も見ながら確認し、実際に全員が消火器を使用した。また、火災発生時のマニュアルを読んで行動を確認した。	齊藤聖菜	鈴木美帆
7	平成27年10月18日 (日) 15:00～17:00	2	岡崎市図書館交流プラザりぶら	5人	・消化活動まとめ	これまでのワークシート等を見て「火災」や「消火器の使い方」を復習し、グループでまとめて発表した。同じ内容で異なる表現をしていたり異なる語を使っているところなどを学んだ。	千葉月香 佐藤大悟	鈴木美帆
8	平成27年10月25日 (日) 15:00～17:00	2	岡崎市図書館交流プラザりぶら	4人	・全体まとめ	各回で何を勉強したか、何をできるようになったか一覧にまとめた。自分とは異なる文字種で書かれているものを読んだり、知らない語彙を確認したりする中で、学びを深める活動を行った。	千葉月香	鈴木美帆 佐藤大悟

(7) 特徴的な活動風景(2～3回分)

活動例①

【第3回 平成27年9月20日(日)】

岡崎消防署による普通救命講習を受講した。内容は日本人が受ける内容と同じで、第2回目の教室で事前学習として重要な語彙やポイントを学んでから講習を受ける形にした。また、「支援に役立つ日本語教室」の学習者も一緒に受講してもらい、必要に応じて通訳をしたり、やさしい日本語で説明したり補助をしてもらった。結果、日本語の読み書きが苦手な学習者であっても、十分に内容を理解してもらうことができた。



活動例②

【第6回 平成27年10月11日】

消火器の部位名(安全栓など)を実物も見ながら確認した。第5回目に使った消火器の使い方のプリントを確認してから、岡崎消防署より訓練用の消火器を借りて、会場の外で模擬消化活動を行った。初めて実際の消火器を使う学習者もいたが、日本語パートナーや学習者同士で助け合いながらスムーズに活動を行うことができた。また、学んだことばを実際に行動する中で確認する様子が見られ、行動・体験することの重要性を感じた。最後に、火災発生時のマニュアルを読んで、消火器を使う前の行動を含めて基本の流れを確認した。



(8) 目標の達成状況・成果

コース最終日にコースや教室活動、日本語講師、参加者に関する無記名のアンケートを実施した。学習者と日本語パートナーには異なる項目を尋ねた。学習者には使用言語のアンケート用紙を配付し、使用言語で回答してもらい、回収後、日本語に翻訳した。アンケートの結果、具体的に言語使用場面が想定しやすく、重要度も高い「救命」「防災」というテーマだったからか、学習内容に対する満足度が高かった。

成果としては、テーマに沿って言語知識と共に関連した日本語を学ぶことで、実際場面の言語使用に結びついた日本語を身につけてもらうことができた。教室で一貫した到達目標を持たず、学習のペースを各学習者に合わせて活動を進めたことで、少しずつ自信をつけてもらうことができた。初めは漢字を読んだり書いたりすることを回避していた学習者も最終回には少し難しい漢字にもチャレンジしていた。コース初めは、「書く」ことに集中してしまい、やりとりがあまり続いていないグループもあったが、回が進むにつれ、参加者同士の関係もできてきて、書く前に話す、書きながら話す、書き終えてから話すなど、やりとりの時間が増えていった。また、やりとりの内容も、初めはWSにやりとりのヒントとして載せていた話題が多かったが、コース後半では普段の生活や家族のことなど、プライベートな話題でも盛り上がっており、関係が築けていたことがうかがえた。

(9) 今後の改善点について

テーマは「支援に役立つ日本語教室」と共通で「救命法」、「防災」の2テーマとし、「生活に役立つよみかき教室」では、いざというとき自分や身近な人の身を守ったり、適切な行動を取ることができるようになるための知識と、それに伴って必要になる日本語とその表記を学ぶことを目的とし、各回の活動をデザインした。上記に述べたように、学習者の満足度は高かったものの、学習項目として設定した読み書き活動は、実生活で遭遇頻度が高いものばかりではなかった。また、よみかきは教える側と教えられる側になりやすく、日本語パートナーに対して教室の目的や対象とする学習者のレベル等の説明を丁寧におこなう必要があると感じた。

取組3-3: 支援に役立つ日本語教室

(1) 体制整備に向けた取組の目標

外国人の暮らしに役立つ日本語及び知識を、実践を通して学べる場を参加型で提供する。また一般市民の日本語教室への参加を積極的に呼びかけ、外国人市民・日本人市民の相互理解の場づくりを行う。日本語教室を通して、外国人市民の学習ニーズ発掘とネットワーキングに取り組む。

(2) 取組内容

「支援に役立つ日本語教室」は救命救急や災害時に支援する側に立てる外国人を育成するため、災害時にどう動くかを日本語でやりとりする中で学習を行うクラスである。消防署のAED講習や防災危機管理課の出前講座を通して支援者となるための基礎知識を行動・体験を通して学んだり、自らが進んで支援者になるために現在できる事、できるようになりたい事をクラス全体で共有し、制度が整っていればできる事を行政側に発信することで、外国人が災害時に支援者になるためのイメージづくりを行うことを指針とした。

(3) 対象者

・外国人市民

(4) 参加者の総数 9 人(延べ人数ではなく、受講した人数を記載すること。)

そのうちの日本語学習者数 9 人

【出身・国籍別内訳】

中国	1人	インドネシア	0人	・フランス 1人 ・ ・
韓国	0人	タイ	0人	
ブラジル	4人	ペルー	1人	
ベトナム	1人	フィリピン	1人	
ネパール	0人	日本	0人	

(5) 開催時間数(回数) 17 時間 (全 8 回 ※第3回だけ3時間)

(6) 取組の具体的内容

回数	開催日時	時間数	場所	参加者数	取組のテーマ	授業概要	指導者名	補助者名
1	平成27年8月30日 (日) 15:00~17:00	2	岡崎市図書館交流プラザりぶら	7人	・自己紹介 ・オリエンテーション	全体のオリエンテーションと、「避難所」の資料を見て災害時にどんな状況になるかを予想してもらった。	稲吉歩美	—
2	平成27年9月6日 (日) 15:00~17:00	2	岡崎市図書館交流プラザりぶら	8人	・救命法 ・119番通報のやり方	豊田市の映像教材を活用し、119番通報、心肺蘇生、AEDの使い方を確認し、ことばや表現を学んだ。	稲吉歩美	大黒浩司
3	平成27年9月20日 (日) 10:00~13:00 または 14:00~17:00	3	連尺学区市民ホーム	8人	・救命救急講座 (3時間講習)	「生活に役立つよみかき教室」の学習者と一緒に、必要に応じて補助しながら、岡崎消防署による普通救命講習を受講。	稲吉歩美	大黒浩司
4	平成27年9月27日 (日) 15:00~17:00	2	岡崎市図書館交流プラザりぶら	5人	・救命救急まとめ	119通報、心肺蘇生、AEDの使い方について学んだポイントを模造紙にまとめた。母国との違いや、体験した上で大切だと思ったことも発表した。	稲吉歩美	大黒浩司

5	平成27年10月4日 (日) 15:00~17:00	2	岡崎市図書館交 流プラザリぶら	7人	防災① ・避難方法について	岡崎市の防災ガイドブックを使用し、地震発生時の対応について確認した。災害時に外国人住民が困りそうなことや、避難するのに必要なものを付箋に書いて発表した。	稲吉歩美	大黒浩司
6	平成27年10月11日 (日) 15:00~17:00	2	岡崎市図書館交 流プラザリぶら	8人	防災② ・防災課による講座 ・避難所体験	岡崎市防災危機管理課より避難所について講座を受講。実際にトイレやテントを組立てたり、避難所名簿に記入してみるなど、簡単な避難所体験を行った。	稲吉歩美	大黒浩司
7	平成27年10月18日 (日) 15:00~17:00	2	岡崎市図書館交 流プラザリぶら	5人	防災③ ・支援者としてできる事	専門用語の意味の確認と、「地震発生から避難所に逃げるまで」と「避難所」で支援者としてできることを挙げて、発表を行った。	稲吉歩美	大黒浩司
8	平成27年10月25日 (日) 15:00~17:00	2	岡崎市図書館交 流プラザリぶら	7人	全体まとめ	「救命救急」と「防災」について、手順やできることを「書く」「読む」「聞く」「話す」「やり取り」の5技能別のCdsにして貼りだし、自分はどうができるようになりたいかなどを話し合った。	稲吉歩美	大黒浩司

(7) 特徴的な活動風景(2~3回分)

活動例①

【第3回 平成27年9月20日(日)】

岡崎消防署による普通救命講習を受講した。内容は日本人が受ける内容と同じで、第2回目の教室で事前学習としてポイントを学んでから講習を受ける形にした。「生活に役立つよみかき教室」の学習者も一緒に受講し、「支援に役立つ日本語教室」の学習者が必要に応じて通訳をしたり、やさしい日本語で説明したり補助をしてもらった。救命救急の知識を身に付けるとともに、支援者として周りを手助けする実践の場とした。



活動例②

【第6回 平成27年10月11日(日)】

岡崎市防災危機管理課より避難所について講座を受講。岡崎市として地震発生時にどんな対応をするのか、個人としてどう対応すべきか簡単に話をしてもらい、避難所はどんな場所か写真や映像を使って説明いただいた。また、避難所で実際に使う簡易トイレやテントを組立てたり、避難所名簿に記入してみるなど、簡単な避難所体験も行った。名簿記入の際に、ふりがながなかったり、世帯主など日本独特の項目があり、多言語版や外国人向けの名簿を作成してほしいなど、学習者から外国人市民の視点での提案を防災課の担当者に提案させていただいた。



活動例③

【発展的活動 平成27年1月24日 災害時ボランティア通訳養成講座】

岡崎市では、災害時に通訳を行うボランティアの養成を行っており、「支援に役立つ日本語教室」の学習者からもっと勉強したい！という声を受けて、スキルアップのために研修に参加した。今回の研修は、岡崎市役所と社会福祉協議会との合同訓練で、通訳の練習だけでなく、災害ボランティア支援センターを運営する日本人のボランティアさんと一緒に簡単な訓練もあり、とても実践的な内容であった。学習者は実践的な内容を学習でき、日本人ボランティアさんには支援者として活躍する外国人市民がいることを知ってもらい、いい機会となった。



(8) 目標の達成状況・成果

コース最終日にコースや教室活動、日本語講師、参加者に関する無記名のアンケートを実施した。学習者と日本語パートナーには異なる項目を尋ねた。学習者には使用言語のアンケート用紙を配付し、使用言語で回答してもらい、回収後、日本語に翻訳した。

学習者の興味関心に沿ってテーマ設定を行ったため、継続して教室活動に参加する学習者が多く、必要な知識・経験を学べる教室活動を開催できた。学習項目ごとや全体でのふりかえりの際に、外国人が支援者になるために必要な制度・仕組みを市へ提言したり、教室活動の中で発見した支援者になるために外国人ができることを自ら考え発表したりすることで、支援者になるためのイメージ作りを行い、学習意欲を向上させることができた。コースが終了後も機会があれば学びたいという声もあり、来年度以降も継続して行っていきたい。

(9) 今後の改善点について

身近な領域での言語使用に大きな問題がない学習者を対象に行ったが、学習者間でのレベル差はあり、活動内容によってはむずかしいタスクもあった。また、災害時に使える知識を学んでもらうために、教室で教材も日本人向けの資料や冊子を基本的にはそのまま使ったが、難しい表現も多くポイントを抜粋したワークシートを作成するなどの工夫も必要であると感じた。

取組3-4: 生活に役立つ日本語教室②

(1) 体制整備に向けた取組の目標

外国人の暮らしに役立つ日本語及び知識を、実践を通して学べる場を参加型で提供する。また一般市民の日本語教室への参加を積極的に呼びかけ、外国人市民・日本人市民の相互理解の場づくりを行う。日本語教室を通して、外国人市民の学習ニーズ発掘とネットワーキングに取り組む。

(2) 取組内容

第1期の「生活に役立つ日本語教室」では日常生活に密着したテーマ(買い物、バス、ごみ)を、第2期では重要度の高いテーマ(救命法、防災)を扱った。本コースでは現在日本語教室が行われていない地域で開催することを踏まえ、新規学習者や日本語パートナーが必要を感じやすいテーマでの実施を検討した。

(3) 対象者

・外国人市民

(4) 参加者の総数 5 人(延べ人数ではなく、受講した人数を記載すること。)

そのうちの日本語学習者数 5 人

【出身・国籍別内訳】

中国	0人	インドネシア	0人	
韓国	0人	タイ	0人	・フランス 1人
ブラジル	2人	ペルー	1人	・イスラエル 1人
ベトナム	0人	フィリピン	0人	
ネパール	0人	日本	0人	

(5) 開催時間数(回数) 14 時間 (全 7 回)

(6) 取組の具体的内容

回数	開催日時	時間数	場所	参加者数	取組のテーマ	授業概要	指導者名	補助者名
1	平成27年11月22日(日) 15:00~17:00	2	東部地域交流センターむらさきかん	2人	・自己紹介 ・オリエンテーション	学習者はCan-doチェックリストの自己評価や、簡単な読み書きや口頭での質問でレベル分けを行い、日本語パートナーは別で教室の主旨説明などオリエンテーションを行った。	千葉月香 稲吉歩美	—

2	平成27年11月29日 (日) 15:00~17:00	2	東部地域交流センターむらさきかん	4人	・電車の乗り方	電車の乗り方の手順をまとめ、駅や電車で見たたり聞いたりする日本語について話した。また次回の行き帰りの電車の時刻を調べた。	千葉月香 稲吉歩美	佐藤大悟
3	平成27年12月6日 (日) 15:00~17:00	2	東部地域交流センターむらさきかん	4人	・実際に電車に乗ってみよう	実際に電車に乗って、駅や電車の中の気になることばや表現を写真に撮影した。写真をもとに確認したり、できたことやできなかったことを話した。	千葉月香 稲吉歩美	大黒浩司
4	平成27年12月13日 (日) 15:00~17:00	2	東部地域交流センターむらさきかん	3人	・電車まとめ	前回撮影した写真を見ながら、出てくる日本語の意味を確認する。意味は母語で書くか、自分でわかるやさしい日本語でワークシートに記入してまとめた。	千葉月香 稲吉歩美	大黒浩司
5	平成28年1月10日 (日) 15:00~17:00	2	東部地域交流センターむらさきかん	4人	・買い物(道の駅)	道の駅に行って、どんな商品が売っているか、買いたいもの、分からない日本語が書かれている商品、表示を写真に撮ったり、メモをしてもらった。	千葉月香 稲吉歩美	山崎彩 伊澤明香
6	平成28年1月17日 (日) 15:00~17:00	2	東部地域交流センターむらさきかん	5人	・買い物まとめ	普段の買い物のレシートや、道の駅で学んだことばや表現をポストイットに日本語と母国語で書きだして、まとめた。	千葉月香 稲吉歩美	山崎彩 伊澤明香
7	平成28年1月24日 (日) 15:00~17:00	2	東部地域交流センターむらさきかん	4人	・全体まとめ	学習者は初回に行ったものと同じCan-doチェックリストを自己評価し、変化をふりかえった。最後に、来年の参考に生活上の行為の一覧(多言語版)を活用し、学習者は学びたい項目、日本語パートナーは重要だと思う項目を選んでもらった。	千葉月香 稲吉歩美	山崎彩 伊澤明香

(7) 特徴的な活動風景(2~3回分)

活動例①

【第3回 平成27年12月6日(日)】

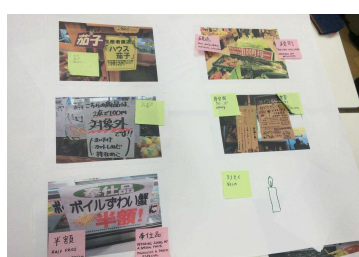
駅や電車利用の際の注意事項を確認してから、切符を実際に買って電車に乗るという活動を行った。駅や電車の中の気になることばや表現を写真に撮ってきてもらい、教室の戻ってから確認をした。また、駅・電車の利用で①できたこと②できなかったこと③これから勉強したいことについて話した。電車には乗れても駅や電車の中にはまだまだ知らない日本語があること、それらを知るとより便利に駅や電車を利用できることに気が付いてもらうことができた。



活動例②

【第6回 平成28年1月10日(日)】

学習者にレシートも持ってきたもらい、レシートに書かれている日本語やことばを確認した。第5回目に行った道の駅で見つけた分からないことばや表現についても写真を使いながら確認した。「税込み/税別」、「対象外」や「〇〇均一」など、日常会話では出てこないけれど、買い物の場面でよく見かける日本語を学ぶことができた。また、学んだことばや表現を日本語と母語で書いて共有することで、他の学習者の学びからも学ぶことができた。



活動例②

【ポートフォリオの活用】

テキストを使わず、書き込み型ワークシートを使って教室活動を行うので、全てのワークシートをファイリングすることで、最後には学習者自身のオリジナルの教材になるようにした。初回参加時には、学習者は自分の4技能(話す、聞く、読む、書く)のレベルを自己評価して記載し、日本語パートナーも参加する目標を書き込むことで、毎回の教室やコース全体を通してふりかえる時の指標にした。また、毎回の教室の最後に学習者と日本語パートナーがお互いに感想を書き合う活動を行って、継続して来なくなる仕掛けづくりと、コミュニケーションを取ることで日本語学習へのモチベーションアップを狙った。

Profile (お申し込み者様)

氏名 性別 年齢

連絡先

所属

行ったことがある国・町名

このコースでの目標

今日のまとめ (がくしゅうしゃ)

回	学習日	テーマ	ボランティア コメント	できたかな? ○をつけよう	感想
1				😊 😊	
2				😊 😊	

(8) 目標の達成状況・成果

日本語教室のない地域での開催で、学習者集めに苦勞をして新規参加者を集めることはできなかったものの、学習者の出席率はほぼ9割以上で、継続して参加してもらえたことは成果だったと言える。コースが短い上、年末年始を挟んだこと、学習者の人数が少なく特に前半は日本語パートナーの人数の方が多い回もあったことで、学習者に比べて日本語パートナーの出席率は高いとは言えなかった。しかし、現在日本語教室が開かれていない地域で多くの日本人住民に外国人住民と接する機会を提供することができた。

第1期から継続で参加している学習者もいたが、類似したテーマでもその時の参加者や体験の場が異なり、前回の体験とは違う、新たな学習項目を自ら発見している様子が見られた。また、約1年を通して行動体験型の教室に参加し、体験することと同じくらい「ふりかえり」が大切であることに気が付いていた。教室で講師がデザインした学習活動の中で学ぶのはもちろん、普段の生活の中でも自らの言語行動を見つめ直し、学習に繋げていく自律学習の姿勢の基礎を養成できたと言える。

(9) 今後の改善点について

今期は参加した学習者の出席率は非常に高く、ほとんどの学習者は毎回参加してくれていた。しかし、1期、2期にも参加していた学習者が大半で、日本語教室が行われておらず、学習機会がないと考えられる学習者の発掘には至らなかった。今期だけでは解決が難しい課題ではあるが、近隣に住む日本人住民には日本語パートナーとして参加してもらうことができ、中には学習者を紹介して下さった方もいた。地道ではあるがこのように少しずつでも近隣に住む外国人住民にも日本語教室の存在を認知してもらい、より多くの方に参加してもらえるよう広報等も含め工夫していく必要がある。そのためにも今後も効果を実感してもらえる学習機会を継続的に提供していきたい。

取組3-5: 病院で使える日本語を学ぼう！

(1) 体制整備に向けた取組の目標

外国人の暮らしに役立つ日本語及び知識を、実践を通して学べる場を参加型で提供する。また一般市民の日本語教室への参加を積極的に呼びかけ、外国人市民・日本人市民の相互理解の場づくりを行う。日本語教室を通して、外国人市民の学習ニーズ発掘とネットワーキングに取り組む。

(2) 取組内容

・当初は予定していなかったが、「生活に役立つ日本語教室Ⅱ」の最後に聞き取り調査を行った結果「病院」について学びたいという要望が多く、開催することとした。

(3) 対象者

・外国人市民

(4) 参加者の総数 14 人(延べ人数ではなく、受講した人数を記載すること。)

そのうちの日本語学習者数 14 人

【出身・国籍別内訳】

中国	0人	インドネシア	0人	
韓国	0人	タイ	0人	・フランス 1人
ブラジル	8人	ペルー	2人	・イスラエル 1人
ベトナム	0人	フィリピン	2人	・
ネパール	0人	日本	0人	

(5) 開催時間数(回数) 17 時間 (全 8 回 ※第3回だけ3時間)

(6) 取組の具体的内容

回数	開催日時	時間数	場所	参加者数	取組のテーマ	授業概要	指導者名	補助者名
1	平成28年2月28日(日) 15:00~17:00	2	連尺学区市民ホーム	12人	・内科と外科の違い ・受付	最初に内科と外科の違いについて話し、豊田市のビデオ教材を活用して、実際の病院での受付の様子を見ながら、分からないことばや表現を学んだ。	千葉月香 伊澤明香	森下裕介 佐藤大悟
2	平成28年3月6日(日) 15:00~17:00	2	連尺学区市民ホーム	11人	・診療と薬	第1回目と同様に、豊田市のビデオ教材を活用して、診療について学んだ。また、薬の袋を持参して、薬をもらう時や飲み時に大切なことばを確認した。	千葉月香 伊澤明香	森下裕介 大黒浩司

(7) 特徴的な活動風景(2～3回分)

活動例①

【第1回 平成28年2月28日(日)】

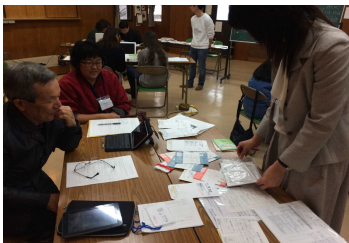
内科と外科の違いについて話し合い、多言語版の問診票に記入しながら、一般的に問診票にはどんな項目があるのかを確認した。それから、豊田市のビデオ教材を活用して、実際の病院の受付で診察の申し込みをする様子を見ながら、分からない日本語や表現を聞き取ったり、病院内の表示について学んだ。



活動例②

【第2回 平成28年3月6日(日)】

前回の復習として、病院の案内板の漢字の意味を確認してから、豊田市のビデオ教材の診察のシーンを使って学習を行った。ビデオを見ながらメモを取り、自分が練習したい症状を2つ選んで、症状を伝えて診察、検査を受ける練習をした。それから、学習者や日本語パートナーに持ってきてもらった薬の袋を見ながら、分からないことばや表現の意味を確認したり、薬をもらう時や飲み時に気をつけることなどを話し合った。



(8) 目標の達成状況・成果

ニーズが高かった内容だったので、初参加の学習者5名も加わり、異なり数で14名が参加をしてくれた。テーマがはっきりしていることと、2回をみの講座で参加しやすかったのが要因と考えられる。出席率も非常によく、みんな熱心に勉強をしていて、病院で使える日本語に対するニーズの高さと、外国人市民にとって病院に行くことのむずかしさや不安があることを改めて感じた。

(9) 今後の改善点について

実際に病院に行くことができないが、リアルな会話を学習するために豊田市のビデオ教材を活用したが、パソコンの数が足りなかったり、音声があつかり合ってしまうと聞き取りづらかったり、運営側の準備不足があった。また、今回は2回講座と少ない期間であるにも関わらず、受付・問診票・診察・薬と欲張った内容にした結果、時間が足りない状態になってしまった。もっと絞った内容にして、広く浅くではなく、学習者が学びたいことに時間をかけられる形にすべきだったと感じた。

取組4: 成果報告会「日本語教室が地域とつながるって？」

(1) 体制整備に向けた取組の目標

・本事業の成果報告の場として、取組1～3の報告を行い、今後の岡崎市における日本語教育の在り方について今後の方向性(指針)を示し、今後の日本語教育の体制整備に活用する要素を共有する。

(2) 取組内容

まず、①成果報告(30分)として、団体紹介と平成27年度の日本語教室事業の報告を行った。次に、他地域の日本語教室の事例から参考にできる点を学ぶため②ポスターセッション(60分)を行い、NPO法人トルシーダ(発表者:伊東浄江)、NPO法人多文化共生リソースセンター東海(発表者:土井佳彦)、とよた日本語学習支援システム(発表者:千葉月香)、幸田町国際交流協会、Vivaおかざき!!(発表者:稲吉歩美)の5団体の取組を共有した。そして、最後に参加者全員で③ワークショップ(90分)を行い、地域につながる日本語教室のあり方について検討した。

(3)対象者

・一般市民(日本人・外国人)、行政関係者、日本語教育関係者、学生 等

(4)参加者の総数 51 人(延べ人数ではなく、受講した人数を記載すること。)

そのうちの日本語学習者数 二 人

【出身・国籍別内訳】

中国	0人	インドネシア	0人
韓国	0人	タイ	0人
ブラジル	2人	ペルー	1人
ベトナム	0人	フィリピン	3人
ネパール	0人	日本	45人

(5) 開催時間数(回数) 17 時間 (全 8 回 ※第3回だけ3時間)

(6) 取組の具体的内容

回数	開催日時	時間数	場所	参加者数	取組のテーマ	授業概要	指導者名	補助者名
1	平成27年12月20日 (日) 14:30~17:30	3	岡崎市図書館交 流プラザりぶら	51人	①事業報告 ②ポスターセッション ③ワークショップ	①成果報告で、本事業の取組内容や 成果を報告し、②ポスターセッションで 近隣地域の日本語教室や取組につい て発表いただき、最後に参加者全員で ③ワークショップを通して地域と日本語 教室がどうつながったらいいか、何を大 切にしていけばいいか話し合った。	伊東かおり	大黒浩司

(7) 特徴的な活動風景(2~3回分)

活動例①

【①事業報告】
取組1~3の成果報告を行った。愛知産業大学の学生に協力してもらい、映像による活動記録を作成し、上映した。



活動例②

【③ワークショップ 地域と日本語教室の今後 in OKAZAKI】
参加者全員で、地域と日本語教室がどうつながったらいいかを話し合った。3グループに分かれ、それぞれ教室運営者、学習者、ボランティアのそれぞれの立場から感じることを話してもらった。それから、参加者のみなさんからも大切だと思うことを話してもらい、1人3枚のふせんを配って、話したことの中から心に残ったことを書きだして貼った。各グループの話し合いは、最初からファシリテーショングラフィックにまとめて記録をしておき、ふせんも含めて、共感するものにシールを貼って行って、地域と日本語教室がつながる上での大切なポイントを参加者みんなで共有した。



(8) 目標の達成状況・成果

当団体の取組の報告、ポスターセッションを通じて、日本語教室のさまざまなあり方を考える機会をつくることができた。他の地域からも当団体の取組や理念に共感してくれる日本語教育の関係者とつながることができ、今後につながる報告会にできた。参加者も51名と多くの方が来てくださり、また日本人市民だけでなく外国人市民や学習者も参加をしてもらうことができた。日本人が一方向的に教えるのではなく、お互いに支え合い学び合える地域日本語教育の場をつくるために、一緒にアイデアを出す機会を持つことができた。

(9) 今後の改善点について

岡崎市内の既存の日本語教室に声かけをしたものの、ポスターセッションの参加をしていただけなかった。個人的に参加していただいた方もいたが、当団体の取組について十分に伝える場ができていないことは、反省しなければならな
いと感じている。取組1のワークショップでも感じたことだが、同じ地域だからといって無理につながる必要はないが、情
報共有ができる関係づくりには努めていきたいと思う。

8. 事業に対する評価について

(1) 事業の目的・目標

外国人市民が地域に参加できる関係づくりのため、生活上の「言葉の壁」を乗り越えるための日本語教育の体制整備を行う。そのためには一般市民(外国人住民・日本人住民)や日本語ボランティア自身が協働し、誰もが安心して参加できる「学びの場」のあり方について考えていくことが重要であると考え。そこで、岡崎市の多文化共生に資する日本語教育のあり方を一般市民が考えるワークショップを実施する。そして、そこで考えた指針を実行しながら体制整備のためのネットワーク構築を行う。

(2) 目的・目標の達成状況

①日本語教育体制の検討

日本人市民も外国人市民も含め、多様な参加者と日本語教育について検討する場をつくることができたのは、大きな一歩だったと感じている。日本語パートナー(異なり数62名)やワークショップに参加してくれる市民(65名)など、地域で日本語教育に興味を持つ市民とつながることができ、今後は人材の発掘・育成にも取り組んでいきたいと思う。また、行動・体験型の日本語教室を実施することで、日本語教育の可能性や、オリジナル教材(書き込み型ワークシート)を地域に提案することができた。

②ネットワーク構築

既存の日本語教室とのネットワークづくりには課題があるが、本事業を通して今までつながりのなかった団体、地域とのネットワークを持つことができた。日本語教育とまちづくり等の他分野との連携を進めることができ、多文化共生や地域につながる日本語教育の実現のためにネットワークを広げていきたい。

(3) 地域における事業の効果、成果

①取組1 市民参加型ワークショップ

岡崎市全体の地域日本語教育を考える仕組みがない中で、7回のワークショップを通して36名の参加をして、検討する場が持てた。

②取組2 Vivaつながるセミナー

既存の日本語教室の形に囚われない、協働や地域とつながることで広がる可能性について地域に提示することができた。

③取組3 暮らしに役立つ日本語教室

行動・体験型で、外国人市民と日本人市民がお互いに助け合いながら学ぶ日本語教室を実施することができた。

④取組4 成果報告会

当団体の取組の成果を広く発信できる場ができ、日本語教育の重要性の理解を促進できた。

(4) 地域の関係者との連携による効果、成果

①岡崎市防災危機管理課、消防署

日本語教室で講座をやっていただくことで、外国人市民が専門的な知識を学ぶとともに、担当課に外国人市民の困りごとや、外国人市民でもできることを知ってもらう機会とできた。

②まちづくり

運営委員に岡崎市でまちづくりを行うNPO法人まち育てセンター・りたの天野氏や、取組2Vivaつながるセミナーの講師に中脇氏に来ていただくなど、地域を巻き込む仕掛けづくりのアドバイスをいただいた。

(5) 事業実施に当たっての周知・広報と、事業成果の地域への発信等について

①SNS(団体ブログ、Facebook)の活用

- ・日本語教育事業関係のブログ掲載数: 44件(3,930PV)
- ・facebookページ数: 5つ(市民参加型ワークショップ、生活に役立つ日本語教室、生活に役立つよみかき教室 支援に役立つ日本語教室、病院で使える日本語を学ぼう)

②映像による記録制作

- ・愛知産業大学の学生に協力を依頼し、写真と映像を組み合わせ取組1～4の活動を記録した紹介映像を作成した。

(6) 改善点、今後の課題について

①現状

市民向けのワークショップには、日本語教育関係者以外にも多くの参加があり、地域の協力してもらいたい人材がいることを認識できた。「協働」や「つながる」をキーワードに行ったセミナーも、日本語教育以外の分野や市外や県外からの参加も目立ち、広域的なつながり作りを実現できた。しかし一方で、市内の日本語教室の関係者の参加は少なく、多文化共生への関心が低いことが分かった。また、日本語教室における外国人市民の地域での対話と共生に繋がる活動には、市内の日本語教室関係者からの消極的な反応も多かった。また、日本語教室では、外国人住民が生活上の「心の壁」を越えて、日本語パートナーや地域の日本人市民との対話の中から日本語について自信をつけていく様子が見られた。ただ一方で、日本社会に参加するためのハードルは高く、地域とつながる自信を持てるような機会を同時に提供していくことが重要だと感じられた。

②今後の課題

上記の現状を踏まえ、以下3つが必要と考えられる。

- ・外国人の地域参加のための言語的・精神的なエンパワメント
- ・外国人の地域参加をつくる人材の育成
- ・外部への情報発信の強化

③今後の課題解決に向けた活動予定

来年度以降は、①参加型ワークショップとOJTによる日本語教育の担い手育成を行いながら、本事業で成果を残した②暮らしに役立つ日本語教室、③Vivaつながるセミナーを引き続き行う。また取組をまとめた冊子や映像を使った④情報発信のツール作成に取り組んでいきたい。